

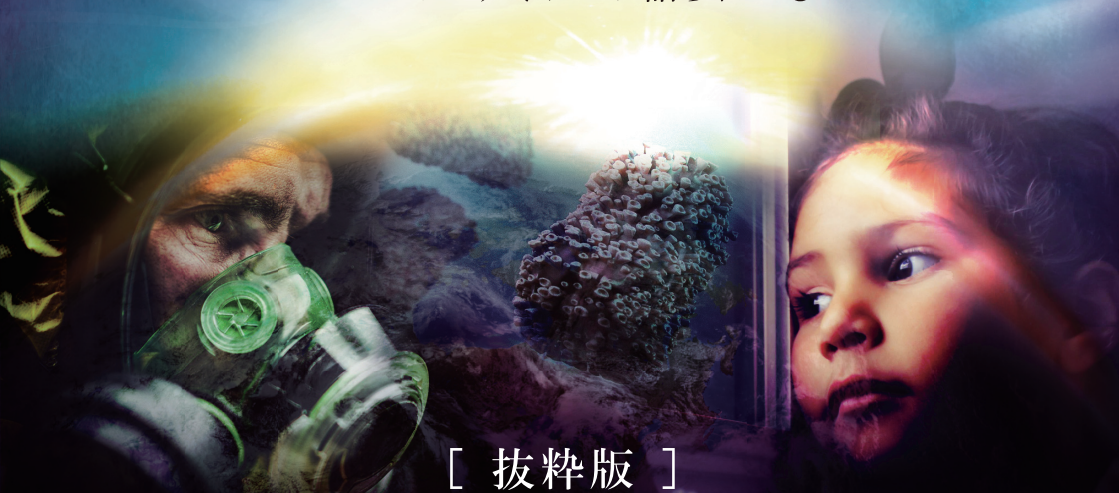
一人の男性が見た

末日に関する驚くべき示現

栄光の示現

VISIONS *of* GLORY

ジョン・ポンティアスに語られたもの



〔 抜粋版 〕

目前に迫る、20年以上前に臨死体験で見た
「パンデミックが襲う世界」

一人の男性が見た末日に関する驚くべき示現

栄光の示現

ジョン・ポンティアスに語られたもの

下川 健一 訳

オリーブ出版

[抜粋版]

目前に迫る、20年以上前に臨死体験で見た
「パンデミックが襲う世界」

荒廃をもたらす疫病

おおよそこのころ、荒廃をもたらす疫病が国中を襲いました。疫病は3つの波となって押し寄せました。それぞれの疫病はさらに毒性が強く、より健康な人の命を奪い、より早く死に至らせました。疫病は南北アメリカと全世界に広がり、何十億人という人々が命を落としました。しかし、救援に來た部隊には数人の死者が出ましたが、ほとんどは免疫を持っているようでした。私の推測では、地震の前の総人口のうち約 25 パーセントが疫病で亡くなったと思います。私は上空を「飛行」した経験から、疫病は人工的に作られたもので、軍隊は予防接種を受けていたことを知っていました。しかし生存者たちがほんとうの感染源に気づいたのは、それから何か月もたってからのことです。この疫病については、次の章でさらに述べることにします。

略奪者たちが軍隊に捕まえられて即座に処刑されると、無法状態は徐々に沈静化しました。軍は市民権も、人権さえも重んじません。彼らには遂行しなければならない仕事があり、力づくで淡々と仕事を行いました。このような状況下では、少なくとも最初のうちはやむを得なかったのかも知れません。

軍隊がソルトレーク・シティに到着した当初、彼らは教会の活動を称賛し、すでに進んでいた救援活動と復興の規模に驚きました。しかし何週間かたつにつれ、軍は教会に対して徐々に寛容でなくなりました。というのは、地元の行政が崩壊したため、教会が唯一生き残った人々の中の組織立った集団となって、再建と再組織を管理していたからです。また、救援・支援が到着したからといって、その働きを止めることはしなかったからで

す。軍隊がこれまでに進軍した都市で、すぐに降伏して民事的な事柄に関する支配を譲らなかったのは、この都市だけでした。

教会の組織は、支配を握ろうとする彼らの計画を阻んでいたようです。程なくすると、軍隊の主要な目的は連邦と地元の政府の代わりに自分たちの政府を築くことにあるのが明白になってきました。教会が事実上の政府として組織され機能していることが分かると、彼らが考えていた企てが頓挫してしまいました。また、軍の内部に国籍によって分裂が生じました。

軍の中にいた少数の合衆国部隊は、教会に反して行動することを拒みました。ヨーロッパから来た部隊の多くもそうです。抵抗した部隊の多くは教会員でした。アジア人の部隊は説得に応じず、教会を敵として見なし、活動を中止させるか消滅させるべきだと判断しました。しかし彼らは直ちに教会を滅ぼすことはできませんでした。それは、彼らに賛成しない部隊がいて、生存者のほとんどは教会員か、自らの生命と福祉について教会から恩恵を受けていたからです。

連邦政府の残存者からのものと思わせる大量のプロパガンダが印刷され、出回るようになりました。「新世界秩序 (New World Order)」の幕開けだと、大々的に宣言しています。世界においてあらゆることが変わったと、政府は主張していました。そして、記憶に残るかぎり、初めて合衆国は自国の基本的な必要を満たせなくなったけれども、世界の諸外国は私たちをこの新しい世界に迎えてくれるのだと主張していたのです。彼らが用いた論理は、「そうでなければ、なぜ銃や爆弾ではなく、食料や医療品を携えてやって来たのだろうか」というものでした。政府はすべての合衆国市民に、ただ降伏して行政権の移行を受け入れるように促しているようでした。

ほとんどの人が連邦政府はもう存在せず、このプロパガンダは外国の軍隊から出回っていることに気づくまで、それほど時間はかかりませんでした。

外国の軍隊に対するほとんどの人の態度は、援助を提供し受け入れてくれるという見方から、侵略軍という見方へと変わりました。地元の抵抗と不信感は大いに膨れ上がりました。特にユタ州の各地に住む人々は、軍隊のことを自分たちの自由と教会を破壊するためにやって来たと見なしましたが、それはほんとうのことでした。ある人々は軍の新しい「法律」に黙って逆らうようになりました。しかし、聖なる御霊に聞き従う人たちは、軍隊に逆らうことは主の御心ではないことに気づきました。主は御自分の計画をお持ちでした。主に従う人たちは、ただ静観して主を待ち望んだのです。

外国の軍隊は最初にプロパガンダを發布し、教会に対する人々の信頼を破壊しようと企てました。そのために、彼らは偽りや非難を書いた出版物を発行しました。また、地元の集會に潜入して地元のワードやステークで起こっていることについて情報を得るために、人を雇いました。そして、騒動を起こし、だれが教会に忠実で、だれが外国の權威に忠実なのか見定めようとするのです。

軍隊は、教会は行政に関する権限を一切持たないとする法律を成立させました。そして行政にかかわっているとしてぬれぎぬを着せ、中心的な指導者たちを逮捕しました。これらは新しい法律に反する罪だったからです。捕らえられた指導者の中には、公開処刑された人もいました。これによって、外国の軍隊に対する人々の感情は劇的に暗くなりました。短期間のうちに、軍隊はすべての行政にかかわる事柄から教会を事実上排除したのです。また、見た目ではだれが「モルモン」なのか見分けがつかないので、アメリカ人が行政上の役職に就くことを法律で禁じました。

中には態度が反動的になる人々もありました。彼らは外国の軍隊から離脱した人たちと一緒に、家を離れて山の中に移り住みました。銃と物資を携えて行き、頻繁に外国の軍隊を襲撃しました。その試みは乏しい動機に基づくものだったので、彼らはすぐに殺害されたり捕らえられたりしてしまいました。あるいは再び社会に同化していきました。残りの人たちは祈りと信仰に心を向け、教会の指導者に耳を傾けました。教会は静かに活動し、主の使命を成し遂げ始めました。教会は軍隊を恐れませんでした、彼らを刺激することはしませんでした。

正式な合衆国軍の隊員や州兵たちを、私は一度も目にしませんでした。後になると、核兵器が使用され、国中やユタにある主要な軍事施設が破壊されたことを知りました。アメリカ合衆国に対して先制攻撃が行われたのです。挑発行為はなかったにもかかわらず、一方的な攻撃でした。

このころ、東海岸の大部分に荒廃を及ぼした疫病が、国中に流行しながらユタにもやって来ました。外国の部隊は、まるで疫病の流行を予期していたかのように防護用具を持参していました。しかし彼らの中にも数人の死者が出ました。すでに述べたように、私たちは後にこの疫病は人工的なものであることを知ります。部隊は疫病の病原体に対する予防接種をしていたのです。

外国の部隊はそのほかの方法でも備えをしていました。彼らはすべての住民に、あるポスター⁴⁰を玄関のドアに貼るよう義務づけました。ポスター



にはリースの絵が描かれていて、その中に斜線が入った黒い円が描かれていました。そのしるしには黒色の線の後ろに赤色で「疫病（Plague）」という文字が書かれています。ポスターの下には数字が付いた白いシールが一行に並び、ポスターには説明書きがあります。黒い線の左側には、その家に生存する人の数を示すシールを貼ります。だれかが亡くなると、黒い線の右側に死者の数を示すシールを貼ることになっています。すると生存者

⁴⁰ スペンサーがこの疫病のポスターについて述べたとき、私にはそれがどのようなイメージでできなかったのか、彼にその絵を描いてくれるように頼みました。すると彼が国連の紋章を描いていることに気づきました。また、斜線が入った円は万国共通の「No」というしるしです。私は上の絵を描くとスペンサーに見せました。彼は、「この絵をどこで見つけたのですか」と尋ねました。それに対して私は「これで合っていますか」と尋ねました。すると彼は、「これは私が覚えているのとまったく同じです。どこで見つけたのですか」と答えました。どうやらこの絵は正確な絵らしいので、本書に載せる価値があると判断しました。また特記すべきことに、巻末の付録にあるジョン・テラーの夢の中でも預言者は、「あらゆる地のあらゆる場所」において、すべてのドアに人が亡くなったことを示すバッジ、またはしるしが付けられていたことを記述しています。

の人数も変えるのです。シールは何度でも貼れるようになっていました。シールを貼り替えるのは、恐ろしく悲しみに沈むときでした。人々はよく玄関先で涙を流し、シールを貼り直すための力を求めて祈っていました。

軍隊はやって来ると、車両で家々を順番に回り、ポスターにバーコード・リーダーガン向けました。リーダーガンはノートパソコンに接続されていて、GPS 機能によってそれぞれの家を認識しました。もし数字が変われば、新たな死者が出たことを示すため、彼らは車庫の前に車を止めました。

死者を入れるための遺体袋が配布され、遺体を裏のポーチか裏庭に置いておくように指示がなされました。そして夕方になると部隊がやって来て遺体を回収して行くのです。疫病が最も猛威を振るっているときは、トラックが郊外の路地に回って来るまで何日も、時には何週間もかかりました。彼らが最も関心を持っていたのは、町の中心部を統制することだったので、すべての遺体が回収されるまで中心部の外へは出て行きませんでした。

疫病にかかると、にきびのように皮膚に小さな水疱がたくさんできました。水疱は体全体を覆うまで大きくなり、数が増え続けます。この病にかかった人は急激に体調が悪化しました。かゆみと痛みがひどく、亡くなる直前になると、水疱が破裂して体液が流れ出ました。この体液は非常に感染力が強く、それに触れた人はだれでも発病するのです。

私たちはこれらのことを悲しい経験から学びました。自分が死ぬことが分かると、多くの人は水疱がはじける前に、自分で遺体袋に入ってファスナーを閉めました。愛する人たちが自らの遺体に触れなくてもいいようにしたのです。これは暗黒の時期でした。大変興味深いことに、最も強い人々が最初に犠牲になりました⁴¹。健康的な免疫を持つ人々が最初に命を落としたのです。人を助けようとして体液に触れたことによって感染した人たちが、次に亡くなりました。

疫病に感染した人の半数以上が最終的には亡くなりました。ある人々は自然の抗体や神の介在によって生き残りました。症状が出始めると、その人は約 12 時間後に亡くなります。疫病は 3 つの波で到来しました。それぞれの波がやって来る度に、さらに多くの人命が奪われました。もし病気にかかっても、生き残れば抗体ができました。

遺体を取り扱う軍人たちは白い防護服を着ていました。彼らは遺体を大きな穴が掘られた公園やフットボールの競技場へと持ち去りました。遺体には燃料がかけられ、火葬されます。軍人たちは私たちに話しかけません

⁴¹ 訳注) 原文では若年層と高齢層が先に亡くなったとあるが、スペンサーによると最も強い人々が先に亡くなったとのことだった。原文の編集に訂正漏れがあったと思われるとのことだったので、本書ではスペンサーの記述を反映することとした。

でした。彼らのほとんどは英語を話さなかったからです。感情も同情も見せません。彼らは汚らわしい仕事をしなければならず、自分が感染したり、あまりにも多くの死体を見て正気を失ったりしないように、淡々と仕事を遂行すると心に決めていたのです。彼らは私たちに対して嫌がらせはしませんでした。人間味はありませんでした。

「飛行」してこれらの光景を見たときには、国中の至る都市で家のドアにこのポスターが貼られているのを見ました。しかし、そのポスターが何を意味するのかは、この示現の後の部分で生身の人間として地上で実際に見るまで分かりませんでした。地震と疫病によって、人口の半数以上が亡くなったという印象を受けました。特に、海岸沿いに死者が多く、内陸部では比較的少なめだったという印象でした。

時間の経過とともに、私が見た光景はますます恐ろしいものとなっていきました。ユタやその他の場所で人々が食料を貯蔵するようにという警告に従い、霊的に備えていた所には希望がありました。その他の場所では、人々は希望を失いました。中には愛する人が亡くなるのを目にして、意図的に自ら疫病に感染する人もいました。人々が希望を失った所では、恐ろしいことが起こりました。その内容については話すのは控えた方がよいと思います。凶悪な犯罪が当たり前のように頻繁に起こっていたと言えば十分でしょう。

人口が密集した地域では、飢えと渇きのために人々は想像を絶する行動へと駆り立てられました。それはキリストが「忌まわしい荒廃」と呼ばれた、この時代に関する預言を成就するものでした。文明は完全に行き詰まり、命あるものすべての終わりを待つばかりでした。人々は絶望の淵で、イエス・キリストは地上の生命がすべてなくなるまで来臨を遅らされると叫んでいました。

どこでも教会が地元に着定している所では、人々の生活は随分良い状態でした。それは、人々や教会がよく備えをしていたからです。食料と水が供給されました。大量の食事が準備され、公共の場、特に教会で提供されました。人々は少なくとも毎日1食の食事にはありつけました。多くの人々は自分が食べるよりも、もっと多くの食料を携えて来て、救援活動を支え、人々の恐れを静めることができました。だれも追い返されることはありません。私たちは持っているものをだれにでも分け合いました。

教会が行政の決定に一切かかわらなければ、外国の軍隊はこれらの救援活動を許可し、食事の提供を支援するために食糧を提供してくれました。

末日聖徒やその他の教会は、家族ごとの居住区に分けられました。軍隊は大きな給水車で水を持って来ました。水は配給制ですが、十分にありま

す。食事は質素で、肉はほとんど目にしませんでした。地元の人々や教会から提供された備蓄食糧でした。

病気になると、その人は地元の医師か看護師から疫病にかかっていないという証明を受けてから、外国の軍隊が大きな病院へ連れて行くという手続きがありました。

部隊はますます支配権を主張するようになり、戒厳令を敷き、市民の自由を差し止めました。新しい法律は、警告か、個人とその家族への食糧配給やほかのサービスの拒否、または処刑のいずれかによって強制執行されました。軍隊は拘置所を置きませんでした。

ちょうどこのころ、疫病はヨーロッパとアジアとアフリカを襲っていました。それらの国々で疫病を発生させたり、流行させたりすることは、意図されていなかったと思っています。しかし疫病は手に負えなくなり、海を渡って行ったのです。その国々での荒廃は、アメリカにおける荒廃よりもはるかに深刻なものでした。時がたつにつれ、結果的に社会全体が完全に崩壊しました。私たちはそのころ、世界中で起きている大規模な自然災害についての知らせも聞きました。ハリケーンや竜巻、洪水、地震、病気などです。メキシコ湾に大きな陸塊が隆起し、津波が北方の地域を飲み込んだのはこのころです。

初期の段階では、アメリカが最も被害を受けましたが、疫病を拡散し、核兵器を発射した国々に破壊が訪れたときの被害は、比べ物にならないほどの荒廃をもたらしました。彼らの政府や金融機関、経済はすべて崩壊しました。それらの国々は強力な地震と大陸の移動に見舞われました。また、暴動や戦争は、アメリカで起きたものとは比べ物にならないほど壊滅的でした。人々は群れを成してそれらの大陸から脱出しようとしていました。後でさらに詳細に説明しますが、天使や身を変えられた人たちは、ふさわしく忠実な人々を教え導き、彼らがシオンへの旅を始めるに当たり、彼らを守りました。

獣の刻印

示現の中で人々にしるしが付いているのを見たり、人々が売り買いするために強制的にしるしやマイクロチップを付けられるという話をしたりしているのを聞いたことはありません。すでに私たちは一人一人に番号が与えられ、家の購入やクレジットの取得など高額の取引にはその番号が必要です。それは獣の刻印の一部だったのかもしれませんが。

ジョン・ポンティアス（著者）について

本を書くときにいちばん苦心するのは「著者について」を書くことです。もともと末日聖徒向けの本を書いたり、教義的なブログを執筆したりするつもりはなかったので、なぜ自分がそのような活動をしているのか説明するのは容易なことではありません。恐らく、私が携わっていることについてのいちばんの説明は、ずっと昔に人生で主の御心を知ったなら必ず従うと決心したということでしょう。主の声に聞き従うことを学ぶのに伴う「危険」は、自らが意図するよりもはるかに良い場所へと続く、さらに困難な旅をすることになるかもしれないということです。私が行っていることとその理由は、そのようにはるかに良いことの一つです。



33年間アラスカ州に住んで家族を育て、幾つかのキャリアを築いた後、主は私たちを突然ユタ州に送られました。テリーと私は二人ともユタ州で育ちましたが、人生のほとんどを「伝道地」で過ごしました。ユタ州に戻ることは、まるで家に帰るようなもので、新しく加わった家族や子供たち、孫たちの近くにいられるようになりました。

ユタ州に来てから、わたしの人生に祝福をもたらし、多くのことを教えてくれた多くの人たちに出会いました。そのうちの一人が、今では大切な親友となったスペンサーです。あなたがこの本で読まれたのは彼の言葉です。

ユタ州に引っ越してから、数多くのファイヤサイドで話し、数冊の本を執筆し、“UnBlogmySoul”というブログを立ち上げて運営し、主の御手にしか成し得ない、多くの予期せぬ神聖なことを達成する機会が与えられました。

この本や、永遠に重大な意味を持つほかのいかなることについて執筆することも、主の御手なくしては成し得なかったことです。主の御手は行くことを望まない所に私を導かれました。しかし実際に着くと、そこが「はるかに良い約束の地」であることに気づきました。

テリーは私にとって最愛の人であり、一番の親友であり、私が出会った中で最も親切な人です。私たちは 8 人の子供と 21 人の孫たちに恵まれています。

翻訳者のあとがき

『栄光の示現』に出会ったのは2014年のことでした。主イエス・キリストへの信仰を強め、近い将来にまさに始まろうとしている神の大いなる驚くべき業へのビジョンを大きく広げてくれるものでした。当初はこの本を自ら翻訳することになろうとは思いませんでした。しかし、人々が主イエス・キリストの再臨に備えられるよう自分にできることは何なのか祈り求め続けたところ、この本を翻訳して出版するように御霊の導きを受けたので、この業に携わることになりました。本書がこの本のメッセージを必要とする人のもとに届き、神の御心がなされることだけが私の望みです。

出版にあたり、レビューや校正をしてくださった方々、日本語の表紙デザインを作成してくださった方、原稿を読んでアドバイスを下さった方々など、ご協力くださった多くの方々に心から感謝申し上げます。また長期にわたって翻訳や出版を支え続けてくれた大切な家族の一人一人に心から感謝の気持ちを伝えたいと思います。

そして誰よりも、あらゆる試練において導きと守りを与え続けてくださった天の御父と主イエス・キリストに、心からの感謝をささげます。人が主イエス・キリストのもとに来て、神の愛を知ることほど大いなる喜びはありません。主は約束されたとおり戻って来られます。その大いなる日が喜びの日となるよう、一人でも多くの人が備えられることを、イエス・キリストの御名によって祈ります。

下川健一

全編を書籍で読んでみたい方はこちらで詳細をご確認下さい

栄光の示現

一人の男性が見た末日に関する驚くべき示現

今や科学的にも否定できない「臨死体験」――

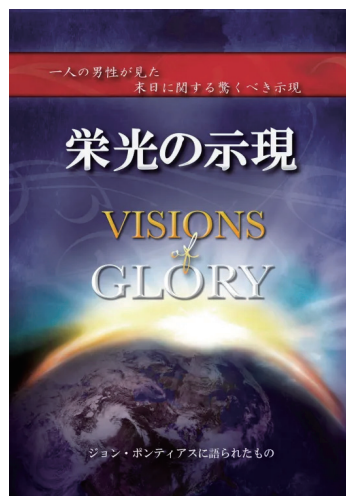
何千人もの生還者の報告から、世界には目に見える物質の次元だけでなく、目には見えない霊の次元が実在することが明らかになっています。

本書は、3 度臨死体験をした米国在住のメンタルヘルスの専門家「スペンサー」が、対外離脱中に経験した、深遠な出来事をつづったものです。

前世にまで及ぶ過去や自分が将来経験する事柄を、まるで目の前で起こっているかのように体験したスペンサーは、神が実在すること、神と人との関係、人の本質と可能性、霊の世界が実在することなど、数多くのことを学びます。

また、聖書の中で預言されている「終わりの日」が訪れるときに、物質主義と世の悪から離れることができない大勢の人が滅びゆく一方で、本心に立ち返り、隣人と助け合い、清められる人々が、神の力によって安全な場所シオンに導かれ、この世の天国とも言える平和と栄光に満ちた世界、福千年を築いていく様子を体験します。

物事の本質に迫るスペンサーの体験記は、数多くの読者に希望と癒し、人生で最も大切なものや今後の備えについて深い洞察をもたらしてくれます。全米では売上げ 20 万部超、アマゾン読者レビュー 2,400 件以上のベストセラーに。



オリーブ出版で書籍詳細を確認する

オリーブ出版の詳細ページが開きます